

DXハイスクール伴走支援事業

ブロック別の取組実践発表会

・研究協議会実施レポート

－ 10/31実施北海道・東京・栃木・山梨ブロック－



実践発表会①（山梨県立笛吹高等学校）

実践発表内容

実践発表を受けたフィードバック（FB）・質疑応答

発表者	山梨県立笛吹高等学校
発表テーマ	情報Ⅱ等の授業での取組
発表内容要旨	<ul style="list-style-type: none"> ■ 取組の概要 <ul style="list-style-type: none"> ● 生成AIを活用し、偽・誤情報に関する学習や、地域特産品を活用した新メニューの考案/画像生成を実施 ● iPadを活用した授業では、等高線学習における「AR地形模型」アプリの活用や、CGによる手話制作を実施 ● 3Dプリンタを活用し、学校のマスコットを使ったキーホルダーの作成を実施 ● 教員向け研修として、生成AIや3Dプリンタの研修を実施。研修は購入先の企業に依頼 ■ 授業がうまくいったポイント <ul style="list-style-type: none"> ● 外部との連携により、専門的な内容を授業に取り入れることができた ● 生徒が情報の真偽を見極める重要性を認識できた ■ 直面した課題と対応策 <ul style="list-style-type: none"> ● 学年全体で接続するとネット利用が不安定になるため、クラス毎に分けて利用し同時接続数を減らした ● 生成AIの使用判断が難しかったため、文部科学省の「生成AIの利活用に関するガイドライン」を参考にした

指導・助言者によるFB	<ul style="list-style-type: none"> ■ 学校設定科目においては、情報Ⅱの内容をいかに効果的に取り入れるかが重要 ■ 学校設定科目カリキュラム内の「データサイエンス」は、2年生の12月から3月までの期間に設定されているが、データを活用した課題分析や評価は、特定の時期に限定せず、探究活動と並行して学べるような設計にすることが望ましい ■ 例えば、新メニュー考案において、メニューの「新しさ」についてアンケートを実施する、メニューをおすすめするチャットボットの作成などを通じて、実践的なデータサイエンスやAIの活用方法を学ぶことができる
質疑応答	<ul style="list-style-type: none"> ■ 生成AIの授業を通じて、どのような変化があったか？ <ul style="list-style-type: none"> ⇒ 生徒には、生成AIを活用する前にまず自分で作品を作成するよう指導し、その後に生成AIを活用することで、文章構成や言葉の選び方に改善が見られた。 ■ 外部人材に期待することは何か？ <ul style="list-style-type: none"> ⇒ 教員が独自に学習しても追いつかない最新技術について正確な情報を提供してもらえることを期待していた



実践発表会②（東京都立三鷹中等教育学校）

実践発表内容

実践発表を受けたフィードバック（FB）・質疑応答

発表者	東京都立三鷹中等教育学校
発表テーマ	生徒の興味関心を高めるデジタル課外活動の促進
発表内容 要旨	<ul style="list-style-type: none"> ■ 取組の概要 <ul style="list-style-type: none"> ● 生徒がデジタル機器を自由に使えるメディアラボを2カ所新設し、ハイスペックPCや高性能キーボード、3Dプリンター等を設置 ● 東京都主催のアプリ開発ワークショップ/ハッカソンや、隣町のフィルムコンテスト等への参加 ● マインクラフト教育研究者による「ルナクラフト」のワークショップを開催 ■ 取組がうまくいったポイント <ul style="list-style-type: none"> ● 生徒が学校に「高品質な機器がある」と認知し喜んだ ● 身近な外部イベントに生徒を誘導することができた ■ 直面した課題 <ul style="list-style-type: none"> ● スケジュール調整や報償費対応等の外部講師アサイン ● 他部署との場所の取り合い ● 情報科教員1名での作業による人手不足 ■ 三鷹中等教育学校のこだわり <ul style="list-style-type: none"> ● 大人（プロ）と同じものに触れる ● ラボや機器の常時解放（鍵をつけない）

指導・助言者 によるFB	<ul style="list-style-type: none"> ■ DXハイスクールは、物品購入の事業ではなく、人材育成を目的とした事業であることが重要 ■ 外部イベントへの参加を促す取り組みは非常に有意義で、探究活動に熱心に取り組む生徒が現れた際には、学会発表やデータビジネスコンテストなど、さらなる挑戦につなげることができるとよい ■ 推進する教員が1～2名であっても、委員会の教員に役割を分担し、学校全体で組織的に取り組むという理解が深まれば、協力者を増やすことができる
質疑応答	<ul style="list-style-type: none"> ■ メディアラボの生徒による活用はどのように広がったか？ <ul style="list-style-type: none"> ⇒ 卒業アルバム制作やプログラミング学習など、生徒自ら必要性を感じた状況で積極的にすることで活用が進んだ ■ どのように事業を推進する体制を整えたか？ <ul style="list-style-type: none"> ⇒ 東京都教育委員会の施策により、デジタルサポーターやデータ入力の支援者が学校に派遣されたことで、事業がより推進された ■ 事業発足時の課題や周囲から理解を得る工夫は？ <ul style="list-style-type: none"> ⇒ 立ち上げ時は生徒が自由に機器を使えるよう鍵をかけない運用に理解を得ることに苦労したが、トラブルも教育の一環と捉え、徐々に協力を得ることができた

グループ協議① 発表内容

協議テーマ	参加校数 (グループ数)	グループ協議の発表内容
情報Ⅱ等の授業での取組	36校 (6グループ)	グループ2 <ul style="list-style-type: none">● 情報Ⅱの中に、DXハイスクール事業で導入した機器やツールをどう取り入れるかを検討した● 探究活動での地域連携・巻き込み方について意見を聞いた● 導入した機器の活用方法を試行錯誤している現状を共有した● 情報Ⅱの内容と整合性のあるカリキュラムにする方法を議論した
生徒の興味関心を高めるデジタル課外活動の促進	96校 (14グループ)	グループ7 <ul style="list-style-type: none">● 購入した機器の納品が年度末となったことでまだ届いていない学校もあり、事業推進の遅れが見られた● モニターの授業での活用や学校説明会での利用等、機材の活用方法について議論した● デジタル機器を活用することで、生徒同士のコミュニケーション能力向上も期待できた● ベテラン教員が多い学校では固定観念を変えるのが難しい一方、事業の説明会等には参加しており、少しずつ変化していくことが予測される

グループ協議② 発表内容

協議テーマ	参加校数 (グループ数)	グループ協議の発表内容	
情報Ⅱ等の授業での取組	5校 (1グループ)	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 5px;"> 文理横断的・探究的な学びにおけるデジタル活用 </div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 5px;"> グループD2 </div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 5px;"> デジタルの活用等に関連した校内研修の実施 </div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> グループE </div>	<ul style="list-style-type: none"> ● DXハイスクール事業に合わせて情報Ⅱを開設したため、現在は良い形を模索している段階 ● 前任教員の異動時の対応については検討が必要 ● 履修者を増やす施策として、探究的な学びを取り入れ、楽しさを実感できる授業をすることで、効果があった事例が共有された
情報Ⅱ等の開設・カリキュラム編成	11校 (2グループ)		
デジタルスペースの環境整備	26校 (4グループ)		
文理横断的・探究的な学びにおけるデジタル活用	46校 (7グループ)		
デジタルの活用等に関連した校内研修の実施	8校 (1グループ)		
生徒の興味関心を高めるデジタル課外活動の促進	11校 (2グループ)		
外部専門人材の活用・関連機関等との連携	25校 (4グループ)		